

「神を信頼し、歩み出す」創世記 12：1－9 「さあ、天を見上げなさい」遠藤師著参照。

序：私達には、時に新しい計画、新しい旅立ちがある。ある程度の方向性だけで、将来のすべてが見えているわけではない。不安が伴う。それでも、不思議にどこかに支えを覚える。神が私達を守って下さる。終末の予感がある。時代の変化の厳しさを思わされる。自分の身近に、家族に弱さを抱えている人がいる時、私達は、その為に主から遣わされているという自覚を持たされる。隣人に仕えることは、私達キリスト者が、神から与えられた新しい命に生きる事と聖書から教えられる。隣人に仕えようとする時、私達は、自分の弱さ、罪深さ、愛の足りなさを、ますます知らされる。離れていれば、傷つく事がなく、疲れを覚える事がない。しかし、関わりが密になればなるほど、相手の弱さが目について、疲れを覚え、そういう自分の忍耐のなさ、寛容でない自分の姿を見せつけられる。こうした事を通して、罪を示して下さる神に感謝し、一足一足、神に信頼するように招かれている恵みを自覚する事は幸い。そうした中に置かれること自体、神の恵みの訓練。逃げるのではなく、主の恵みを確認して行く。絶えず私達が主に問われている事は、「自分では決してできない事の為に、私達は召されている」という自覚。自分の力でできると考える時、傲慢な押し付けと自己満足の罪を犯すかもしれない。そんな時は、事を始める前の、主への祈りは消失してしまう。主の戦いを戦うのではなく、もっぱら自分の戦いを戦う事になる。結局、主の力やその臨在の素晴らしさ、奇蹟の御介入を経験する事にならない為、私達の信仰の成長や祝福につながらない。私達は、神の力を見させていただく度に、神に近づけられ、神の聖なる臨在の前に引き出されて、本当に成長させられる。なぜなら、それは神の御心に触れる経験だから。神の優しい人格に触れたいと願う。

I イスラエルの父祖であり、信仰の父と言われるアブラハム（「大勢の父」の意）。ノアの子供として生まれたセムの子孫、主に特別に選ばれた系図の中で、アブラハムという一人の人物に神がご計画を少しずつ明らかにされる。天地万物を造られた全能の神が突然アブラハムに御自身の臨在を示され、御心を打ち明けられた。ここから、イスラエルの具体的な歴史が始まる。主はアブラハムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい」：1。それは、異教の地とその影響下から離れるようにという指示。異教の地から出て、新たな歩みへと向かいなさい。神との深い交わりの為に、改めて純粋な交わりを始める為に、その場所から出発するように。だから、「生まれ故郷、あなたの父の家を出よ」。創世記の全体を見ると、そういうパターンが見られる。神が事を起こされる時には、これまで慣れ親しんでいた所から、出発するようにという指示がある。もちろん、この地上では、どこに行っても、神との交わりを妨げるものや戦いがある。しかし神はご自身の示す場所に向かわせる事によって、ある場合には信仰の妨げとなっているものから離れさせる為に、また、新たなお取り扱いを経験させ、それによって信仰の成長を与える為に、そこから出発させ、私達と新たな関わりを持つようとなさる。それ故に、新しい出発は、主との新しい交わりという意味において、本当に幸いな事。新しい歩みに向かう事により、もっと深い主との交わりを期待したい。アブラハムには、「生まれ故郷、あなたの父の家を出よ」という指示が与えられた。しかし、具体的な行き先が示されていたわけではない。ヘブル11：8に「信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかわからないで、出て行きました」と記されている。「信仰によって」という御言葉は、私達にとって極めて重要な御言葉。ヘブル11章は、この言葉を繰り返して用い、重要性を強調している。神とい

う存在を無視したら、全くあり得ない生き方。行く先を示されなくて出発する事などあるだろうか。神は、「わたしが示す地へ行きなさい」とだけ言われた。出発して、とにかく踏み出した後で、具体的に示される。聖書時代の人々も、神の御心の大枠は示されているが、細かいところまでは支持を受けていない。結局、神に信頼する以外にはない。この信頼するという事は難しい事。将来のすべてを神は、私達に示されない。それは、信仰と深く関係する。今生きて働いて下さっている御霊に委ねるという事、この御霊に導かれるという事とも関わっている。神はアブラハムを選び、神の祝福の器として用いられる。一方的な神の恩寵。私達に、見ずに神を信頼する者の幸いを教えられる。神を信頼するとは、神がすべてをご存知で、何でもお出来になる全知全能の神であられ、その神が私達に愛をもって最善の祝福を賜るという約束に信頼する事。すべてが知らされなくてもかまわない。隠されている事は、神のものとして、神の領域に置かれている事として、神に信頼する。

II そうした信仰をもって歩み出すなら祝福を与えると神はアブラハムに語られた。アブラハムは、全世界の人々へ神の祝福をもたらす祝福の器として召された。彼を通して地上のすべての民族が祝福を受けるという事。ここには、選民意識はない。神を示す宣教の器としてアブラハムとその子孫を選ばれた。アブラハムに約束された祝福はキリストの十字架の御業によって完成を迎える事になった。異邦人も、このキリストを信じることによって、永遠のいのちをいただき、神の永遠の祝福を受ける事になる。「信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受ける」とガラテヤ3：9で語られている。Iペテロ3：9に「悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福しなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです」と記されている。アブラハムは、神の祝福を受け、その名は祝福となると言われたが、その祝福とは、キリストによる救いを受けるという祝福。その最高の祝福である主の救いを受けた私達も神の祝福をもたらす器として遣わされている。創世記12：6、7を見ると、モレの檜の木のところ、アブラハムは、神と遭遇した。神はアブラハムに現れて、この地を与えられたと言われた。初めから示されたわけではない。主の命令に従って踏み出した、その旅の途上で、御心が更に具体化された。彼は、その時、主の前に祭壇を築いて、礼拝した。そして更に進んで、「ベテルの東にある山のほうに移動して天幕を張った。…彼は主のために、そこに祭壇を築き、主の御名によって祈った」：8。一步一步の歩みにおいて、神への礼拝をささげた。神との深い交わりをした。祝福は神から来る。神との交わりによってもたらされる。それ故に、主と深く交わる事を大切にしたい。神からいただく救いの祝福をもって、私達は、家庭、職場、学校に遣わされる。主が私達を通して働かれ、神の奇蹟の祝福が起こる。家庭、職場、学校にあって、私達が、キリスト者であるという事は、そこに祝福の源（主ご自身の臨在）が存在している事。祝福の源である主ご自身は、教会に、そして私達が遣わされるあらゆる所に、共におられる事、私達の心に生きておられる事を自覚し、一足、一足、主に信頼して歩ませていただきたい！